

折り返し

菅田 忠志

スキーをかついで一歩づつ登りはじめたものの、やはり予想以上にきびしいコースであった。

斜面の傾斜は徐々に増し、スキーをかついだままでは登れなくなり、前に突き刺しては登るといつ尸取虫のような進み方しかとれなくなる。

時間はかり過ぎるが、進む距離も高度もいつこうに稼げない。

幸い樹林帯のため雪崩の心配はないが、腰までもぐりながらのラッセルはきつい。

クラブの山仲間3名で「厳冬の氷の山(ひょうのせん)をスキーツアーで越えよう」と計画し、2mを超える積雪の「流れ尾」と呼ばれる急峻な尾根から登り、戸倉越えのスキーツアーに挑戦したものの、やはり通常ルートにはない厳しい状況が待っていた。

無雪期なら数時間で稜線に出られるコースに、なんと8時間以上もかかってしまった。

頂上手前の森林限界を飛び出した時には、すでにあたりはうす暗く、すぐにヘッドランプに頼る行動となった。

ちらほら降りだしていた雪も、山頂周辺では既に荒れ模様となっており、吹雪も激しく視界もきかない。

計画段階から、よほどの好条件でない限り、山頂でのビバーク(野営)は覚悟していたので、とりあえずこの日は強風を避けた森林の中での野営とする。野営といっても、テントも寝袋も最初から予定しておらず、雪山でのそれなりの一夜である。

ツエルトと呼ばれるビバークテントを頭からかぶり、携帯コンロで雪をとかし、簡単な夕食を済ませたものの、座ったままではなかなか寝つかれない。

長い夜もやっと明けたが、相変わらず吹雪は激しく視界はない。地図と磁石を駆使しながら頂上を越

えさらに先へと進む。まるで視界のない計器飛行だ。

「一の丸と呼ばれるピークから、戸倉への下降コースを探すが見当たらない。少し下つては登りなおすことを繰り返しているうち、自分たちの現在位置にも自信が薄れはじめる。

「危険だ。引き返そう。そう決めてからは、今度はいかに元のコースをしつかりたどれるかだが、進んできた足跡はすぐに降雪で埋もれ、あとかたもななく、ここまで進んできたときと同じくらい困難を極めた。

「万一にそなえ、人目のつく場所まで戻って天候の回復を待とう」と稜線に出る。稜線は強風がまともに吹きつけ、一日目のビバークは、昨晚よりもはるかにきびしい状況で夜を越さねばならなくなっていた。非常食だけでは眠ることもできない。眠れば凍死する。睡魔との闘いがつづく。

苦しく長い夜が明け、やゝ天候回復の兆しが見え、視界も少しながらひらけてきた。

- 3 -

もう大丈夫。しかし、職場では心配しているだろう。やつとふもとの村に下り、すぐに公衆電話から勤務先に電話を入れる。

「今、対策会議を開いている最中だ」

「すみません。ご心配をおかけしました。今夜帰ります」

あれから35年。ときどき寄り道をしたり、折り返したりしながらの人生を歩んできたが、これからもゆつくりでいいから、進む方向だけは間違えないように歩いてゆこう。

- 4 -